

ボリビア コロニアオキナワにおける沖縄県派遣教員が果たした役割について

石垣 忍¹⁾

The role played by Okinawa Prefecture dispatch teachers in Bolivia Colonia Okinawa

Shinobu ISHIGAKI¹⁾

はじめに

1954年6月、ボリビアの県系人の要請から、米国民政府、琉球政府が主導し、第1次移民278名が出発して、60年経過した。その後1964年までの第19次の計画移民団合計3229名の人々が南米ボリビアへ渡った。移民団はボリビアのジャングルを切り開き、原因不明の「うるま病」の発症、洪水、など幾多の困難を乗り越え、この地に安住の地を築き、1998年にはボリビア政府から『オキナワ村』として認定されるに至った。その苦難の中にも関わらず、自らの子弟への教育は怠らなかった。

本稿では、その移住地への教育の変遷、特に移住地からの要請で実現した沖縄県の現職の教職員が派遣され、その果たした役割について紹介するものとする。

うるま・パロメティーヤ移住地における教育

1954年8月第1次移民団の278名は、ボリビアの移住地に到着した。ジャングルの生い茂る移住者は、生活の基盤を作り追われながらも、子弟の教育を疎かにしてはいけないということから、教員経験の移住者数名が授業をおこなったのがその始まりである。当初は幼稚園から開設され、移住者が沖縄から持ってきた古い教科書や教材を使用しながらの授業であった。しかし、その教育も束の間、「うるま病」の発症により授業を停止することになった。さらに「うるま病」の猛威により、移住地変更を余儀なくされ、1955年8月パロメティーヤへ移動となる。そしてその後間もなく、小学校と幼稚園が開校

し、ボリビア政府から1名の教師が派遣され教育を担うこととなった。ところが、このパロメティーヤにおいても土地の取得がうまくいかず、移動することとなる。

1956年10月、新たな土地取得が成功し、現在の第1移住地（コロニア・オキナワ）へ移動、そして移住者の最大の念願であった50haの土地が分配されることとなった。しかし、移住者たちは、2度に渡る移動に費やした資金、配分された土地の開墾や生活の拠点を築くことに一家総出で行うため、教育に関する整備を整える余裕はなかった。

コロニア・オキナワにおける教育

第一移住地の入植地は、東西10km、南北17kmの及ぶ広大な土地で中央に国道、南北に各号線が開設されていた。やがて、1957年各号線ごとに移住組合設立の3つの地域に学校が開校した。当時は、この広大な土地の移動手段はかなり限られており、児童生徒の通学を考慮して地域ごとに学校をまとめたのである。やがて、ブルドーザーによる移住地の伐採や道路の整備が整い、1958年第1移住地（コロニア・オキナワ中央に運動場も整えられた新たな校舎が建設され、コロニア・オキナワ農業組合立小学校が誕生した。さらに、ボリビア政府から教師も派遣され、第一移住地（コロニア・オキナワ）の教育制度は整いつつあった。

しかし、その第1移住地（コロニア・オキナワ）へ派遣される教師の給与は、ボリビア政府（ボリビアの教育法によると地方（農村地帯）教育の最高機

1) 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, 3-1-1 Omoromachi, Naha City, Okinawa Prefecture 900-0006 Japan

関は農務省) から支払われるものの、当時はかなり僻地であったため、その教師の給与以外の諸手当は、第1移住地(コロニア・オキナワ)の農業組合から支出されなければならなかった。その、一方沖縄県からの移住者は毎年送られており、派遣教師も年々増員していき、第1移住地(コロニア・オキナワ)農業組合の負担も大きくなってきた。さらに、政府支給の派遣教師の給与の恒常的に遅れ、教師によるストライキも度々行われており、学校運営が困難をきたすようになってきた。そのような中、第1移住地(コロニア・オキナワ)カトリック教会(サン・フランシスコ・ハビエル協会)が設立された。当時派遣されてきた神父がこの地の教育の窮状を憂い、教会敷地内に教会名と同じ学校を組合設立校を吸収する形で1960年開校した。さらに、時を同じくする頃、プロテスタント系の教会が移住者の師弟のために、夏期休暇の間だけ、日本語塾を開講、後にメトディスタ・エバンヘリコ校として開校し、第一移住地では、このどちらかの学校で学んだ。

これにより、カトリック系とプロテスタント系(メトジスト)が開校したことになるが、旧教と新教と教義の内容が異なるため、それぞれ、学校へ通う移住者たちの保護者対立が少なからずあったとも言われる反面、お互いを意識しながら、良いライバルとして切磋琢磨する状況を生み出したようである。1980年代にあると、ボリビアでは、ハイパーインフレの時代で、その影響で公立の学校は正規の授業が滞り、その状況に日本領事館等の尽力により、



写真1 徒歩・馬・馬車・自転車などを利用しての通学

1987年オキナワ日本ボリビア協会が統括するオキナワ第1日ボ学校が設立され、今日に至っている。

第2・3移住地における教育状況

第5次移住団が入植すると第1移住地は満植となり、その南側に新たに土地を取得し、第2移住地として第6次(1958年)～第13次(1961年)までの移民団が入植した。この頃沖縄県では、移住熱が高まりをみせ、数多くの移住者が送り込まれてきた。

{1959年サンタクルス市に琉球政府ボリビア駐在事務所が開設され、移民の受け入れ、土地の払い下げ申請、土地の配分等の諸手続き等を担った}

第2移住地では、開拓間もないため通学距離を考慮し、移住団ごとに学校を4校開校した。そしてそれぞれの学校にてスペイン語と日本語の複式授業を行い、幹線道路の整備に伴い第1学校と第2学校が合併(1963年)し本部校へ、そして第3学校と第4学校が合併し、新パイロン校となる。さらに1970年本部校と新パイロン校が合併し、ヌエバ・エスペランサ校となり、スペイン語クラスは公立学校、日本語クラスは私立校となる。

一方、第3移住地では、第14次移民団から琉球政府計画移民の最後の移民団となる第19次までが入植した。そこでは、第1・2移住地に比べ比較的通学距離は短く、移住者も少なかったため、モンテ・クリスト校が設立(1964年)した。しかし、1965年以降南米隣国(ペルー、アルゼンチン、ブラジル等)への転住や郷里沖縄に移住地を離れる人々が相次いだ。病気や医療制度や農業、教育に対する不安などによる理由が主であった。2004年までには、第1次から第19次までの移住者の3229人の内約3分の2が移住地を去って行った。この第3移住地が最も定住率が低く、当然ながら、第3移住地では、生徒の減少によりモンテ・クリスト校が1975年閉鎖し、第2移住地のヌエバ・エスペランサ校へ統合され、その後生徒はスクールバスで登校となる。

沖縄県教員派遣事業のはじまり

それぞれの移住地も軌道に乗り始め、その総面積も53000haにもなり、東西11km、南北50kmと広大な土地を取得した。アメリカ政府からも各移住地に援助機材が持ち込まれ、道路整備など公共施設が建設

され、サン・フランシス・ハビエル校、メディスタ校、第2移住地、第3移住地は合同で、ヌエバ・エスペランサ校の学校が移住地での教育を担うようになった。

ボリビアの教育状況は、母国語はスペイン語なので、国語はスペイン語となる。日本の小学校にあたる初等教育は5ヶ年で6歳から11歳まで、12歳から14歳までが中学校で、この8年間は義務教育となる。中等教育は、高等学校が4年間あり、その上に大学制度がある。

1978年には、オキナワ日本ボリビア協会が発足し、その教育部門に、第1移住地の第1日ボ学校（1987年設立）と第2移住地のヌエバ・エスペランサ校がその管轄下に入った。ところが、1980年代になるとボリビアでは、ハイパーインフレとなり経済状況が悪化した。1982年1ドル、200ペソであったのが、1984年には208万ペソまで暴落した。これにより、ボリビア人の教師の給与も滞る事態がおこり、教師によるストライキも頻繁におこった。そのため、数ヶ月も授業のない日が続き、第1移住地の公立校は困難な状態となり、オキナワ日本ボリビア協会が統括する第1日ボ学校が設立し、スペイン語と日本語を並立して開校した。

そのような中、オキナワ日本ボリビア協会の要請で、教員派遣事業が行われた。沖縄県教育庁義務教育課によると、「この事業は、ボリビア国沖縄県民移住地の教育施設へ現職の教員を派遣し、本県出身者の子弟等への教育を行うことにより、これらの子弟の教育の向上を図ることを目的する」とある。

その選抜方法は、現職教員に公募を行い、学校長からの推薦のあった者に対して、選考面接を行い、決定する。資格要件として、県立学校または市町村立学校の教員、小学校、中学校又は、高等学校教諭の普通免許を有する者、音楽または体育の教科を担当できる者、本県で5年以上の本務教員の経験を有する者、年齢は48歳以下の者となっており、派遣教員は原則2名体制で、派遣期間は原則2年間となっている。また、派遣先は、第1移住地の「オキナワ第1日ボ学校」、第2移住地の「ヌエバ・エスペランサ校」で体育担当の教員が「オキナワ第1日ボ学校」で音楽担当は「ヌエバ・エスペランサ校」への配置となっていた。その職務内容は、日本語はもちろん

それぞれの担当である体育又は音楽で、その他に生徒指導主任、生徒会担当となり、学校外でも地域活動としてオキナワ日ボ協会のスタッフとして活動、移住地内の行事活動の運営があげられる。

派遣教員による指導の実績及び成果

派遣事業が始まったころの教員は、これらボリビア移住地の各学校で不足している多くの教材と教具を持参しての赴任であった。第1回の派遣教員はエレクトーン2台と日本の教科書、辞書、水彩絵の具、鉛筆、縄跳びを持ち込んだ。また、夏期休暇で沖縄へ帰省するたびに、県内企業などや学校関係者へ支援を呼びかけ、寄付金や体育教材、音楽の授業で使用するリコーダや三線や大太鼓などを持参した。特に、三線はこの時に入植以来はじめて、郷土の音楽の授業が行われ、校歌のなかった両校に校歌を作り、現在まで歌い継がれているという。

オキナワ第1日ボ学校によると、日本語力が高まり、校内お話大会での発表力や作文集の作文レベルの向上、国際交流基金主催の日本語能力検定の1、2級にも合格するようになったという。また、オキナワの文化の継承にも積極的に取り組み、三線や体育祭でのエイサー指導、さらに「琉球国祭り太鼓」のボリビア支部が立ち上げられ、地域の行事のみならず、博覧会やカーニバル、テレビの出演などボリビア社会に沖縄文化紹介にも影響を及ぼした。2007年には沖縄戦を題材にした演劇指導が行われ、ボリビアの地でも平和教育が行われた。また、派遣教師によって作られたコロニア・オキナワの歌「村の心」が生徒たちに浸透し、事あるごとに、生徒たちが三



写真2 運動会で、派遣教員の指導によるエイサーの演技

線の弾き語りで披露し、郷土沖縄とは正反対の位置にあるボリビアでもしまくとぅば、ウチナー料理など、伝統文化を歌詞にしており、生徒たちが自身のルーツである沖縄を強く意識し、県系人子弟であることに誇りを持つようになったという。

体育の授業においては、本格的な体育の授業や課外活動など専門的な指導が行われ、心身ともに鍛えられ、自主的にトレーニングをするようになり、中にはバレーボール、野球、陸上においてボリビア国内でも上位入賞を果たすようになり、個人の自信にもつながった。また、水泳やハンドボール、キックベースボールなど本来ボリビアにはないスポーツも授業に取り入れ、基礎体力の強化にも繋がり、ボリビア人の体育教師にも指導法を広め、現地教師のレベルアップにも一役買っている。さらに、児童・生徒会活動の指導も行い、自治的・自発的な活動を自身の学校のみならず、地域社会にも目を向けるようになり、地域の清掃活動やバザーなどにも積極的に活動するようになってきた。

学校以外においても、地域行事（駅伝大会、運動会、慰霊祭、豊年祭、入植祭、ソフトボール大会など）運営面を任されたりするなど、地域活動にも貢献した。

おわりに

教員派遣事業は1986年から2013年の間に28名の沖縄県の現職の教員がボリビアのコロニア・オキナワの2校へ派遣された事業である。派遣期間は2年間と教育実践を定着させるために決して長い時間ではない。しかしながら、彼らの熱い情熱と沖縄県での実績とにより、日本語教育や沖縄の文化継承に止まらず、日本式の礼儀など人間教育まで指導、それが28年間継続して行われてきたことにその成果が現れている。

また、派遣教員のみ影響のだけでなく、コロニアの県系人やその学校で学ぶ生徒の姿勢も大きかったのではないかと感じる。中には、ボリビアの地で日本語や沖縄の文化等を熱心に学ぶあまりに、肝心のスペイン語の学習に支障をきたし、上級学校への進学を妨げるのではないかという声もあるという。しかし、ボリビア社会でも日系人の地位は、農業やその他の産業の成功などから次第に認められてきてお

り、その上で日本語や沖縄の文化を学ぶことはとても意義深いことで、その個人と人間性を豊かに人材育成を担っているということである。本制度は現在終了しているが、移住地からの強い要望により、来年度から JICA と協力して1名の教員の派遣を再開していくという。この事業は、ボリビアの移住地に一方的に日本語教育や沖縄文化を与えるだけでなく、移住地からこの沖縄で忘れ去られた沖縄の心や絆をもたらしてくれるのではないかと思う。遠く離れた2つの沖縄同士の架け橋になって欲しいものである。

謝辞

本稿執筆にあたり、派遣教員 宮里哲夫氏（沖縄ボリビア協会会長）、平哲男氏（中部農林高等学校教諭）、ボランティア教員 伊波さと子氏（中川小学校教諭）、山城興太氏（ボリビア県系2世）にはボリビアのコロニア・オキナワの様子についてアドバイスいただいた。本誌を借りて感謝申し上げたい。

参考・引用文献

オキナワ日本ボリビア協会発行

「コロニア・オキナワ入植50周年記念誌」

『ボリビアの大地に生きる沖縄移民』

沖縄ボリビア協会発行

「南米オキナワの教育の奇跡」

『一原生林からの出発一』

具志堅興貞

「沖縄移住地 ボリビアの大地とともに」